文における新-旧情報の弁別に関する発達の研究¹

東京学芸大学 林 部 英 雄²

Some observations on the development of new and old information distinction

Hideo Hayashibe (*Research Institute for the Education of Exceptional Children, Faculty of Education, Tokyo Gakuhei University, Koganei, Tokyo 196*)

Ninety six elementary and junior high school children, ranging from first grade of elementary school (seven years old) to second grade of junior high school (15 years old), were given the task of selecting one of two pictures to go with a sentence in an ambiguous situation, same as Hornby's study (1971). The ambiguity was created by the fact that neither picture actually represented the content of the sentence. However, by the subject's choice of pictures, it was possible to determine which part of the sentence he took to be "old information". The results revealed that, lower grade (first to third of elementary school) children did not distinguish new and old information, but higher graders distinguished them, and the word order was the dominant cue for the distinction.

Key words: linguistic development, new information, old information, word order, particle, Japanese.

文には、話し手、聞き手がともに既に知っている情報(旧情報)と、話し手は知っているが、聞き手はまだ知らないはずの情報(新情報)に関する部分が含まれている。このことは言い方の違いこそあれ、言語学の分野では、比較的早くから知られていた(Chafe, 1970; 久野, 1973)。例えば“ある特定の女が大金を横領した”という事実について

- 1) 大金を横領したのはあの女だ
という話し方をするところがあるが、これは聞き手が、
- 2) 誰かが大金を横領した
ということは知っているが、その“誰か”が実際、誰でもあるのかは知らないと考えられる場合である。即ち 2) は旧情報であり、
- 3) その“誰か”はあの女だ
という部分は新情報である。また聞き手のそれまでの経験によつては、
- 4) ある女が何かをした
が旧情報で
- 5) それは大金横領だ
が新情報である場合もあるだろう。その時は
- 6) あの女がやったのは大金の横領だ
という話し方になるであろう。

上記の例のように“…したのは…だ”というタイプの文は分裂文と呼ばれるが、新-旧情報の区別を明確に表現したい時に使用されることが多い。この他にも久野(1973)のいうように、日本語では、概ね助詞“が”は新情報と、“は”は旧情報と結びついて使われるし、また、語順や、イントネーション等とも密接な関係があることが知られている(久野, 1978; Chafe, 1970)。

言語心理学の分野においても、新-旧情報の問題には興味を持たれ、英語では、Hornby (1971, 1974)により、成人の新-旧情報を明らかに弁別しており、またその弁別のされ方は、文の構造により異なることや、幼児では初期には弁別が完全でなく、徐々に弁別が起こることなどが明らかになっている³。

日本語においては、分裂文という、文の基本的な型とは大きく異なる構造を手掛りとする場合の方が、単なる助詞の相違を手掛りとする場合よりも、発達的に見て早期から新-旧情報の弁別が可能になることが明らかにされている(林部, 1979)。また、イントネーションによって新-旧情報を表現する場合、ピッチの高い部分が新情報を表わし、その他の部分が旧情報を表わすのが一般

³ 但し Hornby は、Presupposition-Focus もしくは Topic-comment などの用語を用いており、これらは、新-旧情報と大変似た概念ではあるが、異なった定義をする研究者もいる。これは言語学においてもまだ議論の余地のあるところとされているが、本稿では新-旧情報という用語で扱っておく。

¹ 本研究は一部、文部省科学研究費補助 No. 56710028 を受けて実施されたものである。

² 実験に快く協力して下さいの中野区立桃園第3小学校の先生方及び児童諸君に深く感謝する。

的であるが (Chafe, 1970), 日本語を母国語とする児童の場合, 少なくとも小学校高学年までに関する限り, そのような理解をしていないと考えられる結果も存在する (林部, 1980). この他に新-旧情報を表現する重要な手段として, 日本語において特に顕著なのは語順であろう (久野, 1978). しかし, 現在まで, 子供が, いつ頃から, どのようにして語順を新-旧情報弁別の手掛りとするようになるのかということは解っていない. そこで本研究ではこの点を明らかにすべく実験を行った.

方 法

被験者 東京都内及び近郊の小学校 1 年—6 年の児童と中学校 1 年—2 年の生徒, 各学年 12 名ずつ, 合計 96 名 (男子 48 名, 女子 48 名), 年齢は 1981 年 10 月の実験の時点で 6 歳 8 か月から 14 歳 10 か月までであるが, 本実験では学齢期の被験者のみを対象としたため, 結果の分析にも年齢は用いず, 学年を基準とした. 参考までに各被験者の平均年齢を掲げておく. 小学校 1 年: 7 歳 1 か月, 2 年: 8 歳 0 か月, 3 年: 9 歳 0 か月, 4 年: 10 歳 2 か月, 5 年: 11 歳 1 か月, 6 年: 12 歳 0 か月, 中学校 1 年: 13 歳 4 か月, 2 年: 14 歳 5 か月. 全員, 日本語を母国語とし, 担任の教師によって障害はないと判断されている.

刺激 実験には文刺激と選択反応用の絵カードが用意された. 文刺激は全て他動詞能動態単文で, 助詞と語順の組み合わせにより次の 5 種が用いられた. 但し, N は名詞を, V は“…ている”という形の動詞を表わす.

N が N を V (ガーヲ)

N を N が V (ヲーガ)

N は N を V (ハーヲ)

N を N は V (ヲーハ)

N は N が V (ハーガ)

N として用いられたのは, 主語の位置に現われるのが, タスキ, キツネ, イヌ, ネコ, ゾウ, ウサギの 6 種であり, 目的語の位置に現われるのが, アメ, リンゴ, バナナ, エンピツの 4 種類である. また V としては, モッテイルか, またはタベテイルが用いられた. 各タイプの刺激文が 4 文ずつ合計 20 文が刺激として用いられた. 助詞と語順の全ての組み合わせを考えるならば, この他に

N が N は V

Fig. 1. A pair of picture cards matched with a stimulus sentence.

という形のものが有り得るが, この文は日本語の文としての自然さが他の 5 タイプの文とは異なり, ほとんど不適格といっても差し支えないようなので刺激文からは除いた. 刺激文は, 無作為な順序で並べたリストを自然な抑揚の女声でテープに録音し, 被験者のうち半数にはリストの先頭から, 残りの半数にはリストの末尾から順に提文した.

Fig. 1 にこれらの文との照合に用いられた 2 枚 1 組の絵カードを示す. この絵カードは刺激文と対になっており, 合計 20 組が用いられた. Fig. 1 の例は,

9) エンピツはイヌがモッテイル

という刺激文と対になったものである. この場合, 被験者が 9) の文は“エンピツについての”文だと考えるならば Fig. 1 の左側の絵を選択するであろう.“…についての”文だと考えるということはとりもなおさずその部分を旧情報と考えているということである (Clark & Clark, 1977, Pp. 92-93). またこの方法は Hornby (1971) に倣ったものであるが, 彼は英語で, 受身文, 分裂文, イントネーション等を独立変数として実験を行い, ある年齢以降の子供では, これらの要因を手掛りとした絵の選択が起こることを確かめている. その反応を統一的に説明できるのは新-旧情報の弁別ということだと考えられ, 本研究では, 上記の実験条件で, 新-旧情報の弁別が可能な被験者は, 旧情報の現われている絵を選択するという作業仮説のもとに論を進めることにした.

この仮説のもとで被験者の反応について予想してみると, 語順に基づいて新-旧情報を弁別しているものは, 文頭の名詞の表わしているものが含まれている絵を選択するであろうし, 助詞に基づいて弁別しているものは, ガの付加されていない方の名詞の表わしているものが含まれている絵を選択するということになる. また, 本実験の場合, 新-旧情報を弁別する手掛りとして, 語順と助詞以外のものは含まれていないのだから上記以外の反応類型のものは, この条件では新-旧情報の弁別ができないということである.

手続き 被験者は校内の一室で 1 人ずつ面接される. 指示は次のとおりである.“これから, この漫画を使ってゲームをします. このテープレコーダーからお話しが聞こえてきますが, それは 2 枚の絵のうちどちらかについてのものです. お話は間違っているかもしれないけれど, どちらの絵について話そうとしたのかあててください.”この指示のあと, 対になる絵カードを見せて刺激文を 1 文ずつ提示し, 右の絵か左の絵かを指さして反応させる. 反応は実験者が観察して記録する.

結 果

結果に関しては, まず各文タイプごとに, 主語の現わ

Table 1
Number of choice of pictures showing the subject of sentence (percentages in brackets)

Grade	Sentence types					χ^2	
	ガーヲ	ヲーガ	ハーヲ	ヲーハ	ハーガ		
1	16 (33.3)	9 (18.8)	13 (27.1)	12 (25.0)	15 (31.3)	2.31	
2	17 (35.4)	10 (20.8)	15 (31.3)	10 (20.8)	11 (22.9)	3.27	
3	15 (31.3)	13 (27.1)	19 (39.6)	12 (25.0)	11 (22.9)	2.86	
4	34 (70.8)	18 (37.5)	35 (72.9)	18 (37.5)	19 (39.6)	12.69	$p < .05$
5	13 (27.1)	7 (14.6)	20 (41.7)	12 (25.0)	7 (14.6)	9.73	$p < .05$
6	24 (50.0)	20 (41.7)	24 (50.0)	8 (16.7)	11 (22.9)	12.83	$p < .05$
J 1	34 (70.8)	5 (10.4)	40 (83.3)	11 (22.9)	3 (6.3)	63.51	$p < .01$
J 2	39 (81.3)	4 (8.3)	39 (81.3)	5 (10.4)	5 (10.4)	76.91	$p < .01$

れている絵を選択した反応と、目的語の現われている絵を選択した反応の数及び率を各学年ごとに算出し、次に各被験者の反応をいくつかの類型に分類し、それぞれの型に属する被験者が各学年ごとに何名いるかを調べるといふ反応群による分析を行った。

Table 1 に各学年、各タイプごとに、主語の現われている絵を選択した反応数及び百分比を示した。本実験では無反応が1個もなかったもので、各細胞の数値をその細胞に属するはずの全反応数（人数×刺激文数=12×4=48）から減じたものが目的語を選択した反応数ということになる。Table 1 の右端には、文タイプごとの反応数に差がないということを帰無仮説として行った χ^2 検定の結果が示してある。Table 1 によれば、小学校の1年から3年では各文タイプごとの反応に差がないが、4年から上の学年では文タイプによって差が見られ、中学校に至ると、その差は更に顕著になることが解る。この差の依って来たところは表からも明らかなように、ガーヲ、ハーヲの構文では主語の現われている絵を選択するものが多く、ヲーガ、ヲーハ、ハーガの構文ではそれが少ないということである。

次に反応群による分析について述べる。被験者の反応を詳細に見ると、少なくとも4種類の反応類型を認めることができる。それらの類型を表の形にしてみると以下のようになる。それぞれの構文で文頭の名詞（N₁）の現われている絵を選択したか、2番目の名詞（N₂）の現われている絵を選択したかを○印で示す。

S群に属する被験者は刺激文で主語にあたる動物の現われている絵を選択したもので主語優位群と呼べるだろう。O群は目的語の物体の現われている絵を選択したも

	S 群		O 群		P 群		W 群	
	N ₁	N ₂	N ₁	N ₂	N ₁	N ₂	N ₁	N ₂
ガーヲ	○			○		○		○
ヲーガ		○	○			○		○
ハーヲ	○			○	○			○
ヲーハ		○	○			○		○
ハーガ		○	○			○		○

ので目的語優位群である。P群はガーヲ、ヲーガの構文ではヲの付加された名詞の現われている絵を、ハーヲ、ヲーハ、ハーガの各構文ではハの付加された名詞の現われている絵を選択したものである。即ち、この群の被験者は助詞によって統制された反応をしていたもので助詞優位群と呼んで良いだろう。但し、明らかにこの群に属すると言える被験者はFig. 2に見られるとおりに少ない。

被験者全体のうち、約半数は完全に上記の類型のいずれかに含まれる反応を示したが、その他のものでも類型の規準から外れた反応が少数である者は反応群に含めることにした。具体的には、1種の文タイプに対して基準からはずれた反応が1個以下であるもの、即ち基準外の反応が全体で5個以下のものはその反応群に属するものと見なした。

上記の類型によって分類されないものには、ある類型に近いが基準外の反応が6個以上であったもの、セッションの途中で類型が変わるもの、即ち被験者が途中で判断基準を変更したと考えられるものや、小学校低学年では全て右側の絵カードばかり選択したものなどが見られた。

各学年における各群の人数をFig. 2に示す。小学校低学年ではO群及びS群の占める割合が高いが、小学校4

年以上でW群が徐々に増加し、中学校1, 2年に至っては、被験者のほとんどがW群によって占められていることがわかる。P群は上にも述べたように、小学校5年で1名、中学校1年で1名と少ない。

考 察

結果をまとめなおしてみると、小学校低学年では、文タイプごとに異なった反応は現われず、主語ないしは目的語の現われる絵を一貫して選択する反応が多い。Table 1 から解るように学年が上がるに従ってガーフ、ハーフの構文では主語の現われている絵を選択し、フーガ、ユーハ、ハーガの構文では目的語の現われている絵を選択する傾向が強くなっている。これは即ち文頭の名詞の現われている絵を選択する傾向が強くなるということで、Fig. 2 において小学校4年生ぐらいからW群が増加してくることによっても裏付けられる。本実験の刺激文において、新-旧情報を弁別する手掛りは語順と助詞のみと考えられているから、この結果は次のように見ることができらる。小学校低学年では語順ないしは助詞を手掛りとした新-旧情報の弁別は行われておらず、高学年に至ってそれらを手掛りとした新-旧情報の弁別が行われるようになる。ここで語順と助詞との関係につい

て考えてみると、Fig. 2 のP群とW群の人数の割合から見ても弁別の手掛りとしては圧倒的に語順の方が優位であることは明らかであろう。しかし、Table 1, Fig. 2 を詳細に見ると、小学校4年頃1度語順の手掛りに依存する反応が増加するが、その後少し減少し、中学校に至ってまた更に増加するという、上野・林部・山田・原田(1979)の言う仮説修正過程が見られる。この中だるみとも言うべき時期に、少数であるがP群に属する被験者が出現していることを考えると、語順に対する依存の低下は、助詞による新-旧情報の弁別が理解され始めた時期にある種の混乱が起こると見るのが妥当ではないだろうか。また、本実験で、語順、助詞による弁別がはっきりしなかった段階でも、分裂文のように文の統語的構造が基本的な形から大きく異なる場合には弁別が起こるのは先述の通りである。分裂文が単なる主語-目的語の倒置以上に大きく語順を変化させた文であることも考えあわせると、最終的には新-旧情報に関する判断において、語順が優先されることが明らかである。

引 用 文 献

- Chafe, W. L. 1970 *Meaning and the structure of language*. Chicago: University of Chicago Press.
- Clark, H. H., & Clark, E. V. 1977 *Psychology and Language: An Introduction to Psycholinguistics*. New York: Harcourt Brace Javanovich.
- 林部英雄 1979 文における既知情報と新情報の弁別に関する発達の研究 特殊教育研究施設報告, 22.
- 林部英雄 1980 文における既知情報と新情報の弁別に関する発達の研究Ⅱ——イントネーションの手掛りについて—— 特殊教育研究施設報告, 30, 1-5.
- Hornby, P. A. 1971 Surface structure and the topic-comment distinction: Developmental study. *Child Development*, 42, 1975-1988.
- Hornby, P. A. 1974 Surface structure and presupposition. *Journal of Verbal Learning and Verbal Behavior*, 13, 530-538.
- 久野 暲 1973 日本文法研究 大修館
- 久野 暲 1978 談話の文法 大修館
- 上野 田鶴子・林部英雄・山田 洋・原田信一 1979 聴覚障害児の文理解 笹沼澄子(編) ことばの遅れとその治療 大修館 Pp. 168-192.

Fig. 2. The number of subjects belonging to each performance group as a function of grade.

—1982. 4. 5. 受稿, 1982. 11. 13. 受理—